

正しかった作業地の選択

前後して、日本のペシャワール会事務今日では、「早魃情報」を収集し始めていた。モンゴルや北朝鮮など、散発的なニュースは報じられていたが、それは自分たちの事業に影響はない遠い出来事としてしか思われなかった。5月にNHKから同会に問い合わせがあり、「中央アジア全域が早魃の被害にあっている。ペシャワール会は何か行動を起こす予定があるのか」と尋かれ、「ペシャワール会は医療団体なので、ダイレクトな行動はとれないが、早魃による感染症など医療問題が生じたら動くことになる」と答えればかりだった。

七月初めにペシャワール会PMSがダラエヌールで大規模な早魃に驚き、「水計画」を始めた際、今度は会の事務局・広報担当の方から新聞社などに逆に問い合わせ、実態をつかもうとしたが、出来なかった。そこで、英語の達者な事務局員・松岡がインターネットによる膨大な情報を整理・抜粋して翻訳・要点だけを一〜二週間毎に現地に報告してくれた。これが唯一の貴重な情報源となった。事務局は以下のように経緯を伝えている。

「……もっと現地情報を知りたいものと、東京の某通信社外信部に電話を入れると、『そういう話は聞いていない。あのあたりはもともと乾燥地帯だから』という返事。ためにインターネットに当たる。日本語の『早魃』サイトでは数件。おかしい。英文のサイトにあたる。すると、一五〇〇〇件がヒット。早魃は、アフガンだけでなく、インド、パキスタンからイラン・イラクに中央アジアまで、エチオピアの飢餓を超える今世紀最悪の規模になりつつあるという。そこで某通信社に、我々が翻訳した情報を送ると、漸く慌て始めた。『うーん、何かIT革命じゃ』(ペシャワール会報六五号)

この頃(二〇〇〇年七月)、日本はサミットの報道ばかりで、森内閣以下日本中がまるで「鹿鳴館」と化して、外国首脳の熱烈歓迎に忙しく、その余りの派手さに肝心の各国首脳が批判的になったという。ともかく、アフガニスタンを襲う未曾有の大早魃は、政治的に重要性が薄かったために、情報社会の外におかれていたというのが真相だろう。

しかし、この英文情報でさえ稀ならず誇張や見落としがあり、アフガニスタン東部一帯の惨状には触れられてなかった。そこでペシャワール会PMSとしては、東部一帯を親しく実見した上で、ダラエ・ヌールとソルフロッド郡に的を絞り、行動を開始したのである。十月になって、国連機関やWFP(世界食糧計画)による「早魃地図」が事務局より送付されてきたとき、東部一帯でばっかりと、ニングラハル州のソルフロッド郡周辺地域とダラエ・ヌールだけが島のように赤く塗りつぶされて、付け加えられていた(次頁参照)。やはり、我々がこの地域に集中する作戦を立てたことに狂いはなかったのである。

